

二〇二四年度 入学試験問題

経済学部A方式I日程・社会学部A方式I日程・現代福祉学部A方式

二限 国 語 (60分)

〈注意事項〉

- 一 試験開始の合図があるまで、問題冊子を開かないこと。
- 二 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
- 三 マークシート解答方法については下記の注意事項を読みなさい。
- 四 問題冊子のページを切り離さないこと。

マークシート解答方法についての注意

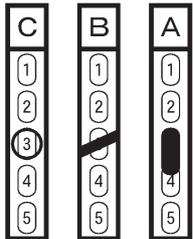
マークシート解答では、鉛筆でマークしたものを機械が直接読み取って採点する。したがって、解答はHBの黒鉛筆でマークすること(万年筆、ボールペン、シャープペンシルなどは使用しないこと)。

一 記入例 解答を3にマークする場合。

(一) 正しいマークの例



(二) 悪いマークの例



○でかこまないこと。

- 二 解答を訂正する場合は、消しゴムでよく消してから、あらためてマークすること。
- 三 解答用紙をよごしたり、折りまげたりしないこと。
- 四 問題に指定された数よりも多くマークしないこと。

〔一〕 つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

近代科学は、十二世紀ルネサンスを通じて、ギリシア科学の論証精神とアラビア科学の実験精神とが結びついたところに成り立った。これは、演繹法えいぎくに基づく論証科学と帰納法に基づく実験科学、あるいは **A** 方法と **B** 方法との結合と
言い換えることもできる。近代科学の方法論はこの両者が統合されることによって確立された。 **I** 「仮説演繹法」と呼

ばれる方法である。これは、まず未知の自然現象を説明する仮説を立て、その仮説から観察可能な帰結を導き出し、その帰結を実験的に検証する、という一連の手続きから成り立っている。 **II** 、ガリレオは斜面の実験を繰り返しながら「落体の法則」を発見する過程で、このような方法を自覚的かどうかはともかく、すでに用いていたと考えてよい。

近代科学は、まさに自然界の秩序を探究するこのような「方法的態度」によって特徴づけられる。「方法(method)」という言葉はもとギリシア語の「メトドス(methodos)」に由来する。これは「〜に沿って」という意味の「メタ(meta)」と「道」という意味の「ホドス(hodos)」とからなる言葉であり、 **III** 方法とは「道に沿って」進むことにほかならない。

ギリシア時代にすでに学問の方法に関してはさまざまな考察が重ねられてきたが、それらを集大成したのは、アリストテレスの「オルガノン(思考の道具)」と呼ばれる一連の論理学的著作であった。具体的には『カテゴリー論』、『命題論』、『分析論前書』、『分析論後書』、『トピカ』および『詭弁論駁論』の六つの著作群を指す。

学問の方法論とは、問題となっている事柄について筋道を立てて思考し、導かれた結論の正しさを誰もが認めざるをえない形で論証する手続きのことである。では、「論証」とはいかなるものか。簡単に言えば、前提となる一群の命題から一定のルール(推論規則)に従って結論となる単一の命題を導き出すことである。われわれの知識は「文」の形で言語的に表現され、そのうちの真偽が明確に定まる有意義な文を「命題」と呼ぶ。したがって、論証の前提や結論を構成するのは命題である。一般に真なる命題から真なる結論を導く論証は妥当(健全)であり、逆に真なる命題から偽なる結論を導く論証は妥当ではない(不健全である)。

IV 、この妥当な論証の構造を明らかにするのが論理学の役割である。アリストテレスは論理学を体系化した

最初の哲学者であった。彼は『分析論前書』において演繹的論証(三段論法の理論)の構造を明らかにした。その体系は「伝統的論理学」と呼ばれている。また彼は『分析論後書』において、帰納的論証を中心とした科学の方法論の定式化を行ったのである。

ここで近代科学の方法論としての仮説演繹法の内容に立ち入る前に、演繹法と帰納法のそれぞれの長所と短所について考察しておこう。演繹法^①とは、普遍的命題(前提)から個別的命題(結論)を論理的に導き出す方法である。その典型は数学における論証、とりわけ幾何学的証明(たとえば、ユークリッドの『原論』)の中に見ることがができる。つまり、一群の公理(前提、普遍的命題)から一つ一つステップを踏んで個々の定理(結論、個別的命題)を導き出すという手続きが演繹法にほかならない。演繹法の特徴は、前提(公理)が結論(定理)を必然的に(例外なく)帰結することにある。それゆえ、前提が正しければ、結論は必ず正しい。V、結論は前提のうちすでに暗示的に含まれていたものを明示的に取り出したものにすぎず、演繹法によつて知識を拡張すること、すなわち新しい知識を獲得することはできない。

このような演繹法に対して、アリストテレスは他方の帰納法を「帰納は個々のものどもから一般的なものへの上昇の道である」と定式化している。つまり、帰納法とは個別的命題(前提)から普遍的命題(結論)を導き出す論証のことである。演繹法とは反対に、帰納法は知識を拡張することはできるが、前提と結論との関係は必然的ではなく、蓋然的(確率的)なものにとどまる。この点を一つの事例で考えてみよう。

たとえば「カラスAは黒い」「カラスBは黒い」……「カラスZは黒い」という有限個の観察事実(前提)から、「すべてのカラスは黒い」という普遍的法則(結論)を導き出す帰納的論証を取り上げよう。この結論「すべてのカラスは黒い」は全称命題(「すべてのSはPである」という形の命題)であり、そこには過去・現在・未来のあらゆるカラス(無限個)が含まれている。すると、前提となる観察事実は有限個であるのに対し、結論として導出された普遍的法則は無数のカラスに言及しているのであるから、前提と結論の間には有限から無限への推論という「帰納的飛躍」が存在することになる。つまり、この論証は将来においてどこかで「白いカラス」が発見される可能性を完全に排除することはできない。それゆえ帰納的論証の結論は必然的ではなく、一定の確率でその法則が成立するという蓋然的な主張にとどまるのである。

このことを捉えて、帰納法が妥当な論証ではないことを指摘したのは、イギリスの哲学者D・ヒュームであった。彼は「Aが起こればBが起ころ」という帰納法に基づく因果的知識には正当な根拠はなく、原因と結果の結びつきは両者の「空間的近接」、「時間的継起」および「恒常的连接」に基づいて形成されたわれわれの「心の習慣」にすぎないものと考えた。科学理論を構築する基盤である帰納法が蓋然的な結論しかもたらさないということから、ヒュームは科学知識の確実性を疑い、最終的には懐疑論に達したのである。

しかし、科学研究の現場では帰納法なしで済ますわけにはいかないし、また科学が経験科学である限り、数学や論理学など形式科学のように、演繹的論証のみに頼ることはできない。したがって、帰納法が演繹法と同じ程度の確実性をもちえないとしても、少なくとも十分信頼するに足る科学の方法であることを哲学者たちは示そうと試みてきた。その代表者がJ・S・ミルである。彼は帰納法を支える原理または公理として「自然の経路の斉一性」を提唱した。これは、「ひとたび生じたことは、十分に類似した状況のもとでは再び生じ、再びどこか同じ状況が繰り返されるたびごとに生じるであろう」ということを意味する。つまり、自然界を観察して同じような状況のもとで一定の現象が生じれば、それ以後も将来にわたって何度も繰り返されると考えてよい、という原理である。この原理に基づけば、自然は統一ある秩序によって支配されているのだから、帰納法は十分に信頼できる妥当な結論を導く、という保証が与えられることになる。

しかし、この「自然の斉一性」がア・プリオリ(経験に先立つ)な原理だとすれば、それは経験科学の方法とは言えず、一種の形而上学的原理となるほかはない。他方、もし経験的原理だとすれば、その正しさは帰納法によって論証されねばならず、「帰納法の妥当性を保証する自然の斉一性の正しさを論証するために帰納法を必要とする」とことなつて循環論法に陥る。このようにして、論証方法としての帰納法の正しさを根拠づけることは、「帰納法の正当化」の問題として多くの哲学者が挑戦してきたが、残念ながらいずれも成功はしなかった。そこから、K・ポパーのように、帰納法はそもそも論理的正当性をもたない推論方法であり、科学にとつては無用の長物にすぎないと主張する哲学者も出てきたのである。

すでに見たように、演繹法と帰納法は、それぞれの長所と短所をもっている。両者の長所を生かして、短所を補おうとする

のが仮説演繹法にほかならない。これを明確な形で方法論として定式化したのは十九世紀の科学哲学者たちであったが、それ以前にも、その萌芽的形態はすでに自覚されていた。たとえば、F・ベーコンは『ノヴム・オルガヌム』（一六二〇年）の中で、近代科学の方法を「経験的能力と合理的能力との真実の正当の結婚」として特徴づけ、その結婚の内実を「^{あり}蟻と^{くも}蜘蛛と蜜蜂」の比喩に託して以下のように語っている。

学を扱ってきた人々は、経験派の人か合理派の人かの何れかであった。経験派は蟻の流儀でただ集めては使用する。合理派は蜘蛛のやり方で、自らのうちから出して網を作る。しかるに蜜蜂のやり方は中間で、庭や野の花から材料を吸い集めるが、それを自分の力で変形し、消化する。

つまり、蟻とは経験的データを収集して結論を導く帰納法の、蜘蛛とは公理から合理的推論のみによって結論を紡ぎだす演繹法の比喩である。それに対して、蜜蜂はさまざまな材料を集めてきては自分の中で変形し消化する。これは帰納法と演繹法を組み合わせた仮説演繹法の比喩と見ることができる。

しかし、仮説演繹法に関してはベーコンよりも前に、さらなる先駆者が存在していた。「分解と合成の方法」を提唱した十三世紀の哲学者R・グロステストである。「分解」とは、現象をその構成要素にまで分析してそこから一般原理を発見する過程であり、明らかに帰納法に相当する。「合成」とは、見出された一般原理を組み合わせてそこからもとの現象を演繹的に再構成する手続きであり、これは演繹法に当たる過程であろう。そして、彼はその過程で導出された命題は経験的にテストされなければならないと主張した。その意味でグロステストの方法論は、十九世紀に定式化される仮説演繹法の原型であったと見ることができる。

十九世紀になると、ジョン・ハーシェルが『自然哲学研究に関する予備的考察』（一八三〇年）において仮説演繹法を明確な形で定式化するにいたる。彼の言葉を借りれば、「科学的探究が成功を収める過程では、帰納的方法と演繹的方法の双方を交互

に使用することが絶えず求められている」のである。その後、W・ヒューエルやW・ジェヴォンズらによってさらに洗練されていった仮説演繹法は、今日では以下のようなステップを踏むものと考えられている。

- (1) 観察に基づいた問題の発見
- (2) 問題を解決する仮説の提起
- (3) 仮説からのテスト命題(予測)の演繹
- (4) テスト命題の実験的検証または反証
- (5) テストの結果に基づく仮説の受容、修正または放棄

明らかに、(1)から(2)へいたる過程では帰納法が、(2)から(3)へいたる過程では演繹法が用いられている。このようにして仮説演繹法は帰納法と演繹法とを組み合わせる両者の欠陥を補い、さらに演繹のもつ比重を高めることによって、帰納法のもつ不確実さがある程度まで補正することができた。しかし、仮説演繹法といえども有限回のテストを通じて仮説を確立する方法である限り、そこで得られた一般法則は、やはり蓋然性を免れるわけにはいかない。それは、一定の確率で法則が成り立つことを保証するにとどまるのである。

だが考えてみれば、自然科学が経験科学である以上、それが常に「新しい経験」に対して開かれているのは当然のことである。仮説は、たとえそれが実験的に検証されたとしても、修正を免れた絶対的真理の資格を獲得するわけではない。予測のつかない新たな経験によって仮説が反証される可能性は常に残っているのである。それゆえ、自然科学の法則に数学や論理学と同等の論理的必然性を求めることは無いものねだりと言わねばならない。その意味で、科学理論や科学法則は永遠に「仮説」の身分にとどまるのであり、それは常に経験的テストによる修正や廃棄の可能性に身をさらしているのである。

(野家啓一『科学哲学への招待』より。ただし、原文の一部を変更した)

問一 本文中の空欄 ・ に入る言葉の組み合わせとして、最も適切なものをつぎの a ～ e の中から一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

- a A 個別的 B 普遍的
- b A 伝統的 B 現代的
- c A 仮説的 B 実験的
- d A 合理的 B 経験的
- e A 絶対的 B 相対的

問二 本文中の空欄 ～ に入る最も適切な語をつぎの a ～ e の中から一つずつ選び、その記号を解答欄にマークせよ。ただし同じ語は二度入らないものとする。

- a したがって b すなわち c そして d たとえば e しかし

問三 傍線部①「演繹法」の説明として正しいものはどれか。最も適切なものをつぎの a ～ e の中から一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

- a 得られる結論は、日常生活の中で経験的に実証されてきたものを、改めて明示的な形で論証したものである。
- b 前提となる命題が真ならば、結論も真にならざるをえないが、導きだされた結論は常に平凡なものになってしまう。
- c 前提が実際に真でなくとも真であると仮定しさえすれば、導かれる結論は真とすることができる、というわけではない。
- d 知識の拡張は困難だが、導出される結論の蓋然性は帰納法と比して相対的に低いため、幾何学的証明などに用いられる。
- e 一つ一つステップを踏んで論証の手続きを進めても、前提となる命題に誤りがあれば、結論も誤りとなってしまう。

問四 傍線部②について、なぜ科学は演繹的論証のみに頼ることはできないのか。最も適切なものをつぎの a～e の中から一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

- a 科学とは、「自然の斉一性」の原理にもとづく経験科学のことであり、その正しさは経験的データを収集して結論を導いていく方法で立証する必要があるから。
- b 科学とは、集積されたデータを検証して確実性の高い説に到達しようとする学問であり、その説は反証可能性を容認しながら更新されていくものだから。
- c 科学とは、自然界に生起する現象を観察する自然科学のことであり、自然界の森羅万象は統制のとれた秩序によりコントロールされていると考えられるから。
- d 科学とは、一連の「心の習慣」に依拠した確実性の低い実践だとしても、そうした実践の積み重ねこそが絶対的真理に到達するための最善の方法であるから。
- e 科学とは、実証実験を繰り返すことで得られたデータから真理に到達しようとする実験科学のことであり、机上論にのみ依拠するわけにはいかないから。

問五 傍線部③「蟻と蜘蛛と蜜蜂」の比喩」を説明したものと正しいものはどれか。最も適切なものをつぎの a ~ f の中から一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

- a 食料を場当たりに集めて備蓄する蟻の様子が、前提と結論とが蓋然的関係にとどまる帰納法の比喩となっている。
- b 様々な材料を集めて有用なものを作り上げる蟻の様子が、新しい知識の獲得につながる帰納法の比喩となっている。
- c 自ら糸を出して規則正しく網状の巣を創造する蜘蛛の様子が、経験的原理から結論を自ら導き出す演繹法の比喩となっている。
- d 自ら出した糸からしか巣を作ることができない蜘蛛の様子が、新しい知識を獲得することが困難な演繹法の比喩となっている。
- e 集めた材料を体内で新たな形に変換する蜜蜂の様子が、論理的整合性を担保しつつ知識の拡張をはかろうとする仮説演繹法の比喩となっている。
- f 収集した材料を自らの内部に取り込み有用なものへと変形していく蜜蜂の様子が、帰納法の不確かさを払拭した仮説演繹法の比喩となっている。

〔二〕 つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

多くの教育評論家が指摘してきたように、従来のいじめは、多様性を否定し、規格に合わせようとする学校共同体に、生徒たちが強制的に囲い込まれた結果として理解できました。かつての学校文化が、その価値観にそぐわない異質な人びとを排除しようとする性質を強くもっていたのは事実でしょう。そのため、学校文化に染まった生徒たちは、自分たちの規格から外れた異質な者に対しても、その排斥的な視線を向け、それがいじめを生み出していたといえます。

かつて、画一的な道徳規範を若い世代に押しつけようとする社会の圧力が強力だった頃は、その枠組のなかへ生徒たちを囲い込もうとする学校文化の圧力もまた相当なものでした。したがって、その抑圧に抵抗しようとして若い世代が独自に築いていた青年文化や少年文化もまた強力なものでした。教師の圧力に抵抗するために、非行文化^①のような対抗文化が形成され、その文化を共有することで、互いの強いつながり意識が保たれていたのです。

学校文化のなかで望ましい自己像を得ることが難しい少年たちは、その価値観を反転させた独自の文化に同調することで、自らの肯定感を保持しようとしていました。だから、たとえば学校の教師に気に入られるような行動をとれば仲間からは蔑まれ、教師に反抗的な態度をとれば仲間からは称賛されたのです。学校文化に反する行為こそが、彼らの仲間内では賞賛的でした。

したがって当時は、学校文化の下においても、あるいは非行文化の下においても、周囲の仲間から肯定的な評価を受ける者と、否定的な評価を受ける者との違いが明白だったといえます。学校文化に対して反動形成されたものが非行文化ですから、両者のあいだでは物差しが反転していたにすぎません。いずれの文化の下でも、人物評価の基準それ自体は明瞭なものだったのです。

ところが、一九八〇年代のなかばあたりから、日本社会を支えてきた価値観は急速に多元化し始めます。それと平行して、人びとの欲望も大幅に多様化していきます。いわゆる消費資本主義社会の到来です。そのため、産業界が学校に期待する人材

も、画一的な大量生産を前提とした工場労働を担うような均質な人間ではなく、多種多様な欲望にもとづいた商品ニーズに応えうるような創造的な感性をもった人間へと移っていきました。政府の教育政策も、産業界からのこのような要請を受けて、大きな方針転換を迫られます。画一化の弊害が指摘され始めた従来の教育に代わり、新たな教育理念として「個性の重視」が登場してきたのです。

今日の子どもたちは、多様性を否定する画一的な檻おりにのなかへ囲い込まれていた時代とは異なって、むしろ多様性を奨励するようになった新しい学校文化のなかを生きています。学校の教師にも抑圧性を感じなくなり、仲間で団結して立ち向かう敵とはみなさなくなっています。そのため、学校文化に反旗をひるがえすことで成立してきた非行文化は、その基盤を徐々に失いつつあります。

しかし、いくら多様性(あ)がシヨウヨウされるといっても、あらゆる個性のあり方が学校で受容されるわけではありません。そもそも周囲の期待にそうものでなければ、その個性が肯定的な評価を受けることはありません。とりわけ学校は、他人との密接な関係をなせば強制された空間です。そのため、今日の子どもたちは、かつてのように画一的な評価の物差しを押しつけられなくなった代わりに、今度は、身近にいる個別の人間から逐一に評価を受けざるをえなくなっているのです。

多様な個性のあり方がシヨウヨウされる現代では、普遍的で画一的な物差しによってではなく、個々の場面で具体的な承認を周囲から受けることによって、自己の評価が定まることとなります。平たくいえば、そこでウケを狙えるか否かが、自己評価にあたって重要な判断材料となるのです。しかも、客観的な評価の物差しがそこに存在するわけではありませんから、相手がどのような反応を示すかは前もって予想しづらく、評価された結果を待つて初めて判断されることとなります。すなわち、自己承認を得られるか否かは、その時になってみなければ分からないのです。

かつて、社会の側に安定した価値の物差しがあった時代には、時々場の空気や気分などによって、個々の評価が大きく揺らぐことはありませんでした。だから、周囲の人びとによる一時的な評価を過剰に気かけたり、それにホンロウ(い)されることも少なかったといえます。場合によっては、「我が道を進む(う)」とココウ(う)にふるまうことすらできました。社会の物差しを自らの

内面に取り込み、それを自分の物差しとすることで、自己肯定感の安定した基盤を確保できたからです。また、そういった支配文化に違和感を覚えていた少年たちも、対抗文化の物差しを自らの内面に取り込み、それを自分の物差しとすることで、自己肯定感の安定した基盤を確保することができました。いずれにせよ、自分が属する文化の正当性に裏づけられたジャイロスコープ(回転儀)が自分の内部で作動していたので、それを支えに一人で立っていることも容易だったのです。

しかし、人びとの価値観が多元化し、多様な生き方が認められるようになった今日の社会では、高感度の対人リーダーをつねに作動させて、場の空気を敏感に読み取り、自分に対する周囲の反応を探っていくかなければ、自己肯定のための根拠を確認しづらくなっています。いわば内在化された「抽象的な他者」という普遍的な物差しが作用しなくなっているために、その代替として、身近にいる「具体的な他者」からの評価に依存するようになっていくのです。

今日の若い世代が、ケータイの「圏外」表示に強い不安を感じ、友だち関係から疎外されることを過度に恐怖するのは、^②このような理由によるところが大きいと思われれます。身近な人間から受ける個別の評価が圧倒的な力を持ち、そのために人間関係の拘束力がかつてよりも大幅に強まっているのです。KY^注という言葉は、まさにその生きづらさを象徴しているように思われます。

誤解のないように述べておきますが、かつてのように規範の拘束力が強かった時代のほうが、子どもたちは幸せだったと述べているわけではありません。その時代は、画一的な物差しを強引に押し付けてくる社会の抑圧力が非常に強く、当時の子どもたちは、その抑圧力のなかでウツセキした^(え)生きづらさを抱えていたはずで、特定の枠組を強制されるうつつとうしさから解放され、多様な生き方が認められるようになったという点では、現代のほうがはるかに生きやすい時代でしょう。

今日の問題は、多様性のショウヨウ由来する新たな困難が、身近な人間関係の拘束力の強まりというかたちで表われている点にあります。ですから、過去と比較して、生きづらさが増大しているか否かを問うことには意味がありません。むしろ、その生きづらさの性質が、社会の拘束力の強さにもとづくものから、人間関係の拘束力の強さにもとづくものへと、時代とともに変化している点に目を向けるべきなのです。

価値観が多元化し、人びとの関心対象が千差万別になった世界で、相手の反応を鋭敏に読みとってつねに良好な関係を保ち、相手からの評価を得やすいように自分の個性を効果的に呈示し続けるのは非常に困難なことです。しかし、それは同時に、自己肯定感を保つていく上で必須の営みでもあります。そして、その営みをこなすために必要となるのは、なんとといっても他者と円滑なコミュニケーションを営む能力でしょう。

スクール・カーストでの生徒たちの序列づけも、勉強やスポーツが得意か否かによってではなく、友だちと一緒にいる場を盛り上げ、その関係をうまく転がしていけるようなコミュニケーション能力の高低によって決まってきました。いまの教室は、その能力が専制力をもった空間なのです。その意味で、コミュニケーション能力こそが自己肯定感の基盤になっているともいえます。

コミュニケーションの対象とされるべき共通目標があれば、その技法が多少は下手であっても、目前の切実な必要に迫られてなんとか意思疎通を図ろうとしますから、コミュニケーション能力の有無は二次の関心事となります。しかし現在は、人びとの関心対象が千差万別になったことで、コミュニケーションされるべき切実な話題は少なくなっているにもかかわらず、自己肯定感の基盤であるコミュニケーションの場はつねに確保され続けなければいけません。その結果、コミュニケーションの形式やその能力だけが極端にクローズアップされることとなります。

しかし、よく考えてみれば、コミュニケーション能力ほど、その評価が他者の反応に依存するものではありません。コミュニケーションとは、その原理的な性質からして、けっして自分の内部で完結するものではなく、つねに他者との関係の総体だからです。コミュニケーション能力は、相手との関係しだいで高くも低くもなりうるものです。それは、じつは個人がもっている能力ではなく、相手との関係の産物なのです。その意味では、スクール・カーストもかなり偶然性に左右されています。しかし、だからこそ、自分の努力では変えられない強い拘束力をもつのです。

現在の日本では、多様な生き方がそれぞれ等価なものとして認められるようになり、ものごとの価値にも絶対的な序列性がなくなっています。とくに若い世代においてはそうです。そんな状況のなかで、もつとも序列性が表面化しやすく、そして拘

東力をもっているのがコミュニケーション能力です。いや、あらゆる価値が相対化されてきたからこそ、互いに異なった価値観をうまく調整しあうために、そして対立や衝突を避けるために、コミュニケーション能力だけが絶対的な優位性をもち、人びとを序列化するようになったといったほうが正確かもしれません。^③

しかし、若い人びとのあいだには、いったんどこかのグループ内に入ったら、けっして誰か特定の人物が優位に立ってはないという原則も存在しています。互いに対等でなければならぬという強い規範があるのです。たとえボケとツツコミの関係にあっても、ツツコミ役が上位になるわけではありません。実際のお笑い芸人たちがそうであるように、ボケ役のほうが立役者でもあったりするくらいで、両者のあいだに上下関係が存在しているわけではないのです。

万が一、人間関係が序列化されそうな場合は、たとえば怒りキャラと怒られキャラの関係に、あるいはいじりキャラといじられキャラの関係に置き換えられることで、互いの立場がフラット化されます。^④ いじめのターゲットに対しても表向きはそうです。「いじめていたのではなく、いじっていただけ」というしばしば耳にする加害側の言い訳も、じつはここから来ています。今日のクラスで、カーストの違うグループとの交友関係が避けられるのも、序列化された関係をあらかじめ回避するための技法の一つといえます。そもそも現代は、ものごとの価値に絶対的な序列性がなくなった時代です。「上から目線」を嫌悪し、できれば人間関係からも序列性を排除したいのが本音でしょう。だから、どうしても上下関係になりそうな人間は、異なるカーストとして最初から圏外化してしまい、認知の対象とすらしません。

したがって、同じグループの内部で、対等性のバランスがわずかでも崩れると、とたんに被害感情が募っていくことにもなります。今日、いじめの理由としてよく使われやすい口実が「正当防衛」である背景には、このような事情があります。対等性の微妙なバランスを保ち続けるためには、グループ内の一人ひとりに配分されたキャラをはみ出すことはタブーなのです。

（土井隆義『キャラ化する／される子どもたち』より。ただし原文の一部を変更した）

注 K Y K II「空気」、Y II「読めない」で、「空気が読めない」という意味。

問一 傍線部(あ)～(え)のカタカナにふさわしい漢字を、下の各群の a～hの中からそれぞれ二つを選び、その記号を解答欄にマークせよ。

(あ)	シヨウヨウ	a	承	b	証	c	賞	d	掌	e	要	f	用	g	楊	h	揚
(い)	ホンロウ	a	奔	b	本	c	翻	d	叛	e	隴	f	弄	g	狼	h	浪
(う)	ココウ	a	個	b	弧	c	故	d	孤	e	候	f	抗	g	高	h	巧
(え)	ウツセキ	a	空	b	鬱	c	打	d	移	e	籍	f	績	g	堰	h	積

問二 傍線部①「非行文化」についての説明として、適切でないものをつぎの a～eの中から一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

a 非行文化は、道徳規範を重んじる学校文化に染まることができずにいた少年たちが、学校文化を敵とみなすことで独自の立ち位置を築き、自らの肯定感を得ようとして生まれたものである。

b 非行文化は、学校文化の画一的な価値観に対抗する形で形成されたため、そこでは規律に同調する態度は否定され、対立する姿勢が共有されていた。

c 学校文化の規格に囲い込もうとする圧力が強かった頃は、それを敵と見なす非行文化の基盤も強固であったが、価値観が多様化するに伴い、その存在理由が曖昧になっている。

d 非行文化は、学校文化と相反する価値観を持っていたが、文化の共有が仲間からの評価に繋がっている点では共通しており、そのためいじめの温床にもなっていた。

e かつての学校文化の中で望ましい自己像を得ることができなかった少年たちは、対立する非行文化の価値観を自らの物差しとすることで、自己肯定感の土台を確保することができた。

問三 傍線部②「このような理由」とはどのようなものか。最も適切なものをつぎの a～e の中から一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

- a 多様性が認められるようになり、自分が属するグループに同調しなくなってきたため。
- b 客観的な評価の物差しが存在しなくなり、自己肯定感を保つ術がなくなってしまったため。
- c 価値観が多分化した現代では、自分の個性を主張し、周囲の評価を得なければならなくなったため。
- d 画一的な物差しが失われた今日では、自己肯定感の拠り所としての他者からの評価が安定しなくなったため。
- e 他者の反応が多様化した現代では、対人レーダーを作動させ、常に相手の関心に合わせる必要があるため。

問四 傍線部③における「コミュニケーション能力」とはどのようなものか。適切なものをつぎの a～e の中から二つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

- a 相手の反応を読みとり、相手の期待通りに振舞う能力
- b 多くの友人を作り、価値観を共有するために主体的に発信していく能力
- c 相手と良好な関係を築く上で、自分の力だけではコントロールできない能力
- d 相手との関係次第で評価が変わり、序列づけにも影響を及ぼす能力
- e 良好な関係を保つために、自分の個性が出すぎないように振舞う能力

問五 傍線部④「互いの立場がフラット化されます」の説明として、最も適切なものをつぎの a ～ e の中から一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

- a 対立や優劣が表面化することを避けるために、所属するグループごとに様々なキャラを使い分ける。
- b コミュニケーションにおいて、いじりキャラといじられキャラの関係を、常に対等に保つ。
- c 人間関係において序列性は依然としてあるが、それがないかのように振舞う。
- d 多様性が認められるようになり、異なるカーストのグループとは衝突を避けた交流を試みる。
- e 人間関係の序列化が表面化しそうな時には、キャラを変えることで自分の居場所を確保する。

【三】 つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

「美はセンスの問題よ」とか、「センスのないやつに芸術が分かるはずはないさ」というような言い方を、よく耳にします。この考え方に従えば、美学はセンスの問題に集約されることになります。では、センスとは何でしょうか。

『新明解国語辞典』によると、それは「物事の微妙な感じ(よさ)を知る心の働き」です。この定義は、非常によく考えられたもので、文句のつけようがありません。ですから、ここで終えてもよさそうなのですが、もう少し考えてみたいことがあります。このセンスが問題とされる領域を考えたときの芸術の位置とか、この「心の働き」の具体的なあり方などが気になります。

センスが問題となるのは芸術だけではありません。わたくしの先輩に哲学のセンスということを重視するひとがいます。どれほどの書物を読み、知識を蓄えたとしても、センスがなければろくな論文は書けない、という考えです。では、センスがあれば勉強は無用なのかと言えば、さすがにそうだと断言はしないでしょうが、論考を真に価値あるものにするのは勉強よりもセンスだ、という考えなのだと思います。この問題が、西洋の詩学のなかで、古来延々と議論されてきた《詩人にとって天分と研鑽さんのいずれが重要か》というテーマとそっくりであることは、面白いですね。《哲学者のセンス》は、やはり詩人／芸術家のセンスを適用したもののようです。

哲学だけではありません。いつ頃からか、野球やその他のスポーツ選手についても、センスが語られるようになりました。特にチームプレーのスポーツに見られるように思います。スポーツにおけるセンスとは何でしょうか。

それは単なる筋肉的な運動能力ではないでしょう。基礎的な運動能力ならば、わざわざセンスなどと言う必要はありません。ゲームの進行のなかで、状況を読み取り、その判断に基づいて的確に反応する総合的な能力を指すもの、と思われれます。senseという単語の意味(それについては、このあとで分析します)からして、身体的な能力を指すとは考えられませんか、その基本はむしろ、『新明解国語辞典』のいうような「心の働き」にあると思われれます。そうになると、スポーツのセンスの正体は、全体的かつ総合的な判断力ということになります。このように考えると、哲学のセンスについても同じ考え方が妥当しそうで

す。すなわち、哲学者のセンスとは——この言い方が浅薄であるせいか、「センス」が問題とされるのはあまり大した哲学者のようには思われませんが、それは別として——

A

だと、理解することができます。

「全体的かつ総合的な判断力」というこの「センス」の概念は、考えてみれば、驚くべきものを含んでいます。sense という英語のものと意味が「感覚」で、とくに哲学者たちは、感覚とは身体の持ち分であり、判断力というような知性の働きとは正反対の事柄だと考えているからです。スポーツや哲学について「センス」とは言っても「感覚」とは言わない、というところに、センスの何たるかを考えるうえで糸口がありそうです。つまり、総合的な判断力という意味でのセンスを考えるのであれば、それを五感(視覚、聴覚、味覚、嗅覚、触覚)の意味での感覚から分けてかかる必要がある、ということなのです。

感覚のもともとの役割は身体の保全にありました。五感を普通、下級と上級の二種類に分けます。嗅覚、味覚、触覚は下級感覚と呼ばれますが、それら三者の共通性は、接触によって機能する、ということにあります。触覚については言うまでもありません。味覚もまた、食べ物を舌のうえにのせなければ働きません。どれほど美味しそうな馳走も、見ているだけでは、味は分かりません。しかし、美味しそうな匂いは、離れていても分かりますから、嗅覚は事情が異なるように見えます。しかし、嗅覚の場合も対象との接触が必要なことに変わりはありません。味覚との違いは揮発性の物質に反応するというだけです。ご馳走から立ち上る(それが揮発性ということです)匂いの正体は、微小な物質の粒子で、これが空気と混じって鼻のなかに入り、鼻腔の奥にある嗅細胞に接触することによって生じた刺戟(げき)です。

下級感覚が生命保全の役割を担っていることは、容易に理解されます。熱湯の熱さを感じなければ、熱すぎる温泉に飛び込んで、全身やけどを負うおそれがあります。腐った食べ物は、舌のうえにのせるまでもなく、いやな匂いで分かります。素朴な自然状態にある食物は、舌が食べられるかどうかの判断をしてきたものと思われれます。しかし、知覚するのに接触する必要があります。危険と背中合わせです。青酸カリのような毒物は、舌で判定しようとすると、既に手遅れとなる恐れがあります。対象の本体に対して少し距離を取ることのできる嗅覚にしても、毒ガスのようなものに対してはなすすべがありません。

そこで、進化した動物は聴覚と視覚という遠隔感覚を具そなえています。耳は遠くの物音を捉とらえることができますし、目は近づいてくる敵の姿を正確に知覚します。これら上級感覚によって、哺乳動物は危険に対していち早く備えることができます。

① 生物としての人間にとつての感覚は、このようなものです。しかし、芸術における感覚がこのようなものでないことは、明らかです。生きてゆくとき、われわれは五感のすべてを以て世界に向かい合っています。世界からのシグナルが、物音のかたちで来ようが、視覚像としてもたらされようが、あるいは匂いとして与えられようが、すべてに対応できるようになっています。それに対して、視覚芸術としての絵画や聴覚の芸術である音楽は、何よりもまず、この《五感スタンバイ》の状態から、知覚の領野を一つの感覚のそれに限定したところから生まれてきたものです。それはいわば、狭いノズルを通った水が、一層勢いを増して迸ほとばしり出るかのようなのです。眼を閉じて音楽を聴こうとするのは、この意味で自然なことですし、BGMの流れる美術館にいかかわしさを感ずるのも、そのためです。このように、芸術は感覚を非身体的に用いる、と言うことができます。

サバンナに住む民族には、視力が二・〇以上のひとがいくらでもいるそうです。しかし、そのことはかれらが絵画の理解において優秀であることを意味しない、ということは誰でも承知しています。たしかに「目のよさ」が画家に要求されることは間違いありませんが、それは身体能力としての「眼のよさ」ではありません。美術における「目」、音楽における「耳」は既にメタファー（隠喩と訳しますが、この単語が見慣れないというひとは、比喩とか譬たとえと理解して下さい）です。五感は多くのメタファーを提供している領域です。たとえば、「**B**」とは、目に見えない、隠れた疑惑や権益などをすばやく捉とらえる鋭い勘を意味しています。美学では、とくに味覚のメタファーが重要です。「味わい」は、芸術表現のニュアンス、つまり微妙な違いを指して言われますし、英語をはじめとして西洋語では、味覚を表す語がそのまま「味わい」を意味しています。たとえば英語の *taste* がそうです。この語はまた「趣味」とも訳されますが、それは、一七〜一八世紀の西洋美学で、美を見分ける特別の能力の意味で用いられたときの意味に対応する訳語です。面白いことに、日本語の「趣味」は《好んで行う余暇の活動》の意味でも使われますが、この意味の「趣味」を西洋語では *taste* とは言いません。日本語のなかでこのような観念のつながりが作られたものと思われませんが、しかとしたことは、分かっていません。

スポーツ選手のセンスが非筋肉的であることは、いまや明らかでしょう。センスはもともと肉体的な能力としての感覚のことですが、そのメタファー的な使用の次元の問題です。そもそも五感にしてからが、何らかの判断に関わるという意味では、身体から精神へとまたがる領域の現象です。哲学者たちのあいだで感覚が不評なのは、知性や理性と呼ばれる純粹精神と較べて不純ということであって、それが精神の働き方の一つであることは否定すべくありません。しかも、身体的な知は、近年、その独自性が注目されている現象です。たしかに、美や芸術についてセンスを、すなわち精神としての感覚を、本気になって分析してみることは、心そそられるものと言えます。

この精神としての感覚は、感覚用語のメタファーとしての用法に現れています。「味覚」が「味わい」や「趣味」になることは、右に触れました。五感を総括した「感覚」(sense)という語にも、メタファー的な使い方があります。その代表がコモン・センスです。コモン・センスには大きく分けて二つの意味があります。古典的な「共通感覚」とは、《五感に共通の感覚》という意味で、これも既に精神的な働きです。それ以上にメタファー性^③が顕著なのは、第二の近代的な「常識」の意味でのそれです。この場合には《世の人のびとに共通のセンス》という意味で、そこから「常識」という訳語がでてきました。この意味でのセンスが顕著というのは、それがそもそも、感覚ではないからです。常識はいかなる意味でも五感のような感覚ではありません。

美学では、メタファーとしての感覚、すなわち《決して感覚ではなく精神の働きなのだが、感覚的な働き方をする精神》を好んで感性と呼びます。感覚とは違うという趣旨で採用された術語かと思われます。美や芸術がセンスの問題だというものの言い方は、議論を拒絶する雰囲気ゆえか、軽薄な印象を免れませんが、これも感性というテーマに集約させることができます。その感性は、実は西洋に生まれた近代美学にとって最も中核的な観念の一つです。英語で美学を表す *aesthetics* という単語の語義は「美学」ではなく、「感性学」です。それは美と芸術を感性と結びつけて理解したところから生まれた命名なのです。

(佐々木健一『美学への招待』より。ただし原文の一部を変更した)

問一 本文中の空欄 A に入る最も適切なものを、つぎの a ～ e の中から一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

- a 書物から得た知識に頼らず、実際の経験にもとづいて、議論の論点を的確に見きわめる能力
- b 社会の状況が変化しても、一貫して自分の問題意識を追究して、独自の思想を生み出す能力
- c 一冊の書物を細部まで丁寧に読み、一つ一つの言葉の意味を深く考える能力
- d 時代や哲学の状況を的確に把握して、そのなかで適切な主題を立て、それを論ずる能力
- e 難解な思想や抽象的な概念の意味を、適切な具体例を通して、正確に判断する能力

問二 傍線部①「生物としての人間にとつての感覚」についての説明として最も適切なものを、つぎの a ～ e の中から一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

- a 人間は身体の保全のために下級感覚と上級感覚の両方をそなえているという点で、他の動物と異なる。
- b 下級感覚の役割が生命保全にあるのに対して、上級感覚は正確な知覚のための能力である。
- c 生命保全のためには、遠隔感覚である上級感覚のほうが、接触によって機能する下級感覚より重要である。
- d 下級感覚も上級感覚も、どちらも本来は人間が生存するために必要な能力である。
- e 人間のように進化した動物では、下級感覚より上級感覚のほうがよく発達している。

問三 傍線部②「BGMの流れる美術館にいかがわしさを感ずる」とあるが、その理由として最も適切なものを、つぎのa～eの中から一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

a BGMの流れる美術館では、遠隔感覚である視覚と聴覚しか働かせられず、五感のすべてを以て世界と向き合うことができないから。

b 芸術は感覚を非身体的に用いるものなのに、美術館でBGMが流れると、身体感覚が活性化されることになるから。

c 絵画は視覚を集中的に働かせることで成立する芸術なのに、美術館でBGMが流れると、視覚と聴覚の両方が働かされるから。

d 美術館では展示されている絵画の主題に合ったBGMを流すべきだが、絵の内容にふさわしくない音楽がかけられると違和感が生じるから。

e 絵画や音楽を鑑賞するためには、知覚の領野を一つの感覚のそれに限定する必要があるが、BGMの流れる美術館では、五感のすべてが刺激されて絵に集中できないから。

問四 本文中の空欄

B

に入る最も適切な語句を、つぎのa～eの中から一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

a 耳が早い

b 鼻がきく

c 肌で感じる

d 目が高い

e 舌が肥える

問五 傍線部③について「メタファー性が顕著」とはどのような意味か。最も適切なものをつぎの a～e の中から一つ選び、その記号を解答欄にマークせよ。

a コモン・センスという言葉を「常識」という意味で使うときには、完全に精神的な働きを指している。

b 《世の人のびとに共通のセンス》という意味でのコモン・センスは、「常識」と訳されたことによって精神的な働きのメタファーであることが明白になった。

c コモン・センスには「常識」という意味もあるが、常識は身体から精神へとまたがる領域の現象なので、比喩的性格が強い。

d コモン・センスは「共通感覚」の意味ではメタファーではないが、「常識」の意味では明らかにメタファーである。

e コモン・センスは本来は「共通感覚」を意味していたが、近代以降は「常識」という比喩的な意味で使われることが多い。

問六 本文の内容に合致するものをつぎの a～f の中から二つを選び、その記号を解答欄にマークせよ。

a 美や芸術はセンスの問題だという言い方は、軽薄な印象を与えるので、哲学者たちのあいだでは不評である。

b スポーツや哲学について「センス」と言うときに問題になっているのは、肉体的な能力ではなくメタファーとしての感覚である。

c 五感の中で味覚は接触によって機能する下級感覚の一つだが、芸術表現のニュアンスや美を見分ける身体能力でもある。

d 西洋の美学では、美や芸術の経験を適切な五感のメタファーで表すセンスが何よりも重要である。

e 感覚は知性や理性と完全に対極にあるわけではなく、身体的な知として精神の働きの一端をなす。

f 感性は知性や理性と同様に西洋の近代美学の中核をなす観念である。